

ひまわりからの メッセージ

152号

2024. 7. 8

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人：中野にみ子

芭蕉が辿った 奥の細道は？



先日、岐阜県障害幼児研究会と当センターの共催で、東京から木村順先生を招いて「感覚統合と子どもの発達」について二日間の講座をもちました。

朝の九時半から午後四時半まで二日間の座学は、講師の先生も聴講する私たちも、さすがにかなりハードです。学ぶことは多くありましたが、同時に分からないことがまた増えて、結局、多くの方々のご要望で、来年度も来ていただくことになりました。(7/26〜7/27)

先生は後泊されたので、翌日は岐阜城にでも……と思いましたが、あいにくの雨で、奥の細道記念館をご案内することになりました。

住吉灯台や舟つき場などを回ってから記念館に向か

いました。実は、私はじっくりと記念館を訪ねたことがありませんでしたので案内人としては心許無いものでしたが館内では十住から深川へ、そして日光、奥州、北陸などを巡って大垣へと芭蕉が一八〇日をかけて歩いた旅路を俳人の黛まどかさんの解説で動画放映されていました。十五分ずつ四部構成になっていて、なかなか見応えがありました。その日は東小学校の子どもたちが見学に来ていたので、途中に子ども版の映像が入りましたが、私ははじめて芭蕉の足跡を辿ることができました。かつて訪ねた平泉の中尊寺や那谷寺などなつかしい映像もあり、木村先生のお蔭で雨の一日、奥の細道の世界に浸ることができ、心にゆとりをもらったように思っています。

西濃には、芭蕉の句碑は多く、毎井の泉には「葱しろく洗ひあげたる寒さかな」、上石津の山道には、確かに「山路来て何やうゆかしすみれ草」があったように記憶しています。私の記憶もだんだん朧になりつつあります。それにしても山形の立石寺に行きたいとずっと思っていました。今となっては、体力的にあきらめざるを得ないでしょう。

記念館で出会った東小学校の子どもたちは、どんな学びをしたのでしょうか。次世代の子どもたちに文学の面白さが受けつがれていく欲しいと思った出会いでもありました。

アセスメントについて



S・E・N・S（特別支援教育士）の会が発行している「LD・ADHD&ASD」の七月号は、特集として「アセスメント再考&発達障害者の就労」を取り上げていますので、少しご紹介したいと思います。

包括的アセスメント

子どもの発達支援におけるアセスメントに際しては、子どもをある一面だけでなく、背景も含めて多面的に理解していくべきだというのは当然です。行動という表面上表われている事実にも発達の課題という側面だけでなく、心理的葛藤や不安全感、学校や家庭の環境など様々な要因が考えられるわけですね。

神戸大学の鳥居は、例えば「他児とのトラブルが多い」という行動の背景には、発達の課題の一例として、

- ・言語理解・表現がうまくできない
- ・多動性・衝動性
- ・興味・関心の偏り
- ・認知的な偏り
- ・発達の遅れなどをあげ、心理的葛藤や不安全感の一例として

- ・失敗経験が多く自己肯定感が低い
- ・何かのトラウマ

- ・愛情欲求 承認欲求 を上げています。そして、環境要因の一例としては次のようなものが記されています。

- ・学級崩壊
- ・いじめ被害
- ・貧困や虐待

つまり、行動観察からの情報を分析し、生育歴や心理検査等も理解の補助として使っていくべきというのでは、七月号には、算数のアセスメントとして「算数障害スクリーニング検査」、感覚のアセスメントとして「感覚処理のツールである「感覚プロフィール」認知のアセスメントとして「ウェクスラー検査以外に「KABC-II」や「DNI-CAS」などの検査が紹介されていました。

私は算数障害スクリーニング検査については、よく分かりません。感覚プロフィールは発達障害の子たちによく見られる感覚刺激の過反応はよく知られているものの、低反応や感覚探求については余り知られていないのではないだろうか。何かに熱中していると他は目に入らず呼びかけも無反応になったり、誰かとぶつかっても気づかなかったり、けがをしても痛みには気づかない等は低反応と考えられるものです。又、感覚探求は、授業中に鉛筆をかじっていたり、体のあちこちをさわったり、先生や他の子たちにやたらと触りたがったりして叱られることも多いのです。行動を叱るのではなく、その行動が感覚の問題から来ている

るかもしれないと考えることが大事でしょう。

KABC-IIは、認知能力として、継次、同時、計画、学習の各尺度をしるべ、語彙、読み、書き、算数などなどの位習得されているかが分析でき、るようになっていきます。そして、段階的な教え方がその児に合っているのか、全体から部分へと進めた方がいいのかというようにKABC-IIの結果から指導方略がたてられるように作られています。

DN-CAS(ディーエヌキャス)は、高次脳機能損傷の人の脳機能の回復を検討する場合にも使われることがあるようですが、認知能力の尺度としては、プランニング、注意、同時処理、継次処理の四つから成り立っています。プランニングは、実行機能と呼ばれることが多いため、脳の前頭前野の機能と考えられています。又、同時処理、継次処理ということばも大分知られるようになって来ています。上野一彦が「私たちの教え方で学ばない子には、その子の学び方で教えるように」と書いていますが、集団の二者指導の中ではなかなか困難なことでしょう。けれども子どもの困りが何故、どこから来ているのか探っていく中で、その子の可能性もきっと見つかるとはならないでしょうか。

WISC-IV から WISC-V へ

ところで最近ウェクスラー検査でWISC-Vが見られるようになってきました。やっとWISC-IVに慣れてきたのに……と思われる方も多いことでしょう。

このIVからVへの変更で一番大きな変更点は、4因子構造から5因子構造になったことです。エッ何のこと？と思われる方も多いでしょう。

IVの検査返しをしてもう一つ、四つの指標について説明を受けたはずですが、FSIQといって全検査IQを示した後に、言語理解、知覚推理、ワーキングメモリ、処理速度という四つの指標を見て、その差が何を意味するのか、子どもの困りを知って指導に活かしてという試みがなされてきました。

WISC-Vでは知覚推理という指標はなくなって、代わりに視空間と流動性推理という指標が新たに加わったのです。つまり、言語理解、視空間、流動性推理、ワーキングメモリ、処理速度という五つの指標によって分析することになったのです。しかもワーキングメモリは、WISC-IVでは聴覚性ワーキングメモリだけだったのに、Vでは視覚性ワーキングメモリと聴覚性ワーキングメモリの両方を反映しています。また、IVでは補助的な指標と

して、一般知的能力指標(GAI)と認知熟達度指標(CPI)を算出できましたが、Vでは、さらに量的推理指標(QRI)、聴覚ワーキングメモリー指標(AWMI)、非言語性能力指標(NVI)の三つが加わり、主要指標得点と区別されます。評価のステップについても異なりますが、今後Vが多くなってくれば、解釈や所見を聞かれる機会も増えて、皆さんの理解も進むだろうと予測しています。

就労支援について



特別支援教育士資格認定協会理事長の花熊暁は、学校教育期における子どもの将来に向けた支援のあり方について、次のように書いています。

就労がうまくいかない人に見られる問題として、日常生活や社会生活を送る上で誰もが身につけていなければならない基本行動(あいさつ、感謝・謝罪の仕方、身だしなみ、規則正しい生活リズム、自律的で自発的な生活態度など)が身につけていないこと、就労の土台となる働く意欲の低下などがあげられる。

職業実習先の会社の人々は「職場では仕事の技能を教えることはできるが働くことへの意欲は家庭や学

校で育てておいてほしい」と言われる。

現在の小・中・高において学業や知識にかかわる概念的スキルに偏りがちで、社会的スキルや実用的スキルの支援が十分ではない。特別支援教育には、

この部分の取りくみが必要であり、そのためには

① 子どもの興味・関心や意欲を育てること

② 自分にできることは自分でしようとする自立的態度を育てること

③ 周囲の人たちのために何かをしようとする気持ち、人のために役立ったことを嬉しく思う気持ちを育てること、そうした気持ちや子どもが経験できるように機会を多く用意すること等、内面を育てることと同時に、「基本行動」を各年齢段階でしっかりと身につけていくことと記しています。言ってみれば過保護のいましめです。支援は引き算でなければならないと改めて思いました。

8月の予定

・親の会・ピアサポート
はお休みです。
2日 垂井 } 成人相談
6日 養老 }

9月の予定

9日 センター 親の会
(ソフピアセンター)
18日 ピアサポート
3日 養老 } 成人相談
6日 大野
9日 揖斐川
27日 輪内